

## 制度と規範をめぐる一考察

今村 薫

### 1 はじめに

私はカラハリ狩猟採集民(グイとガナの2言語集団)の「分配と協同」について行動と物質の流れから分析したことがある(今村, 1993)。この論文において、これまで、肉の分配などの物質的側面のみ注目されがちであったシェアリングに、「活動の共有」という概念を取り入れることで、社会的次元でも相互交渉が同時進行していることを指摘したのである。そして、行為や物質の分かち合いを統御するシステムを「シェアリング・システム」と名づけた。

さらに、このシェアリング・システムの適用範囲の考察をすすめ、グイ/ガナ食物分配だけでなく、婚姻、儀礼、民族生殖理論を、一つのシェアリング・システムに位置づけた(今村, 2007)。この論考において、食物分配は「自然資源の共有」の系に、婚姻、儀礼、民族生殖理論は「身体資源の共有」の系にと、シェアリング・システムは大きく二つの系に分けられ、これら二つの系はパラレルな関係にあることを示した。

シェアリング・システムが目指しているものは、「資源の最大の共有」である。彼らの社会全体を見渡せば、「誰と共有するか」という食物資源をめぐるテーマは、結婚、儀礼、民族生殖理論においても、そのまま焦点となる事柄である。すなわち、それぞれの場面において、「誰

と性関係を共有するか」「誰とともに儀礼を行うか」「誰と子どもを共有するか」という具体的な問いを、個々の相互交渉に投げかけるのである。

一方、食物分配と婚姻規則の二つの制度は、それぞれ、「資源の独占」を一定のルール下に認めており、この制度が埋め込まれているシステム全体の目指す「シェアリング」と相反する関係にある。

本稿は、制度と規範の関係を、グイ/ガナの事例を詳細に分析することで明らかにする。さらに、人類進化論の立場から、レヴィ=ストロースが提唱した「婚姻連帯の理論」、また、類人猿段階における「規則に従う」相互交渉の萌芽についても検討する。

### 2 自然資源の共有

#### (1) 食物分配

狩猟採集民の社会は「平等主義的」であるといわれており、その平等主義の例として、しばしば狩猟で獲れた肉の分配について言及されてきた。

グイ/ガナの場合、エランド、ゲムズボック、ハーテビーストなどの大型獣の肉は、まず、狩猟に参加した男性の間で第一次の分配が行われる。このとき、狩猟に参加していなくても、騎馬猟における馬の持ち主には肉が分配される。さらに、第一次の分配を受けた家族は、

身近な親戚や友人へと第二次の分配を行う。この段階で、妻の両親、ついで、夫の両親が優先される。ここまでは、ルールに沿ってほぼ自動的に肉が分配されていく。

以上のような「義務的な分配」のあとに、個人同士の関係によってさらに肉が再分配されていく。このようなやりとりを私はとくに「自発的な供与」と呼んでいる（今村，1993）。分け与える相手は、一緒に採集に行く仲間など、日常の付き合い方で決まり、状況に応じて「分ける」「分けない」の判断は揺れる。

供与された肉は、各小屋でいったん料理してから皿に入れて知人の小屋へ運ばれる。また、その場にいた同じキャンプに住む人や他のキャンプからの訪問者には、たとえ一口であっても料理が分けられる。こうして、最終的にキャンプ全体に、さらにキャンプを越えて肉が配られることになる。

また、女性たちが、各人が採集した食物を持ち寄って、一つの鍋や臼で混ぜ合わせて料理し、そのまま一緒に食べたり、配りなおしたりすることがよくある。食物分配において、「持てる者から持たざる者へ」食物が配られることが、これまで強調されてきたが、この事例のように「各々が持っているものを、一つに混ぜ合わせて、配りなおす」、すなわち、量的には増えも減りもしないが、質的に異なるものを新たに作り出すという作用もまたシェアリングの重要な側面である。

## (2) 協同作業

グイ／ガナの人々が、食べ物を頻繁に分け合ったり、鍋や臼などの道具を借り合ったりする様子は、物質面での「分かち合い」の一例である。また、行動面での分かち合いとして、日常生活のさまざまな場面で「協同作業」や「手

伝い」が見られる。

狩猟において、獲物を複数で挟み撃ちしたりして役割分担を行う。倒した獲物を解体するときには、数人の男性が協同で作業をすすめる。また採集活動は、協同作業をとくに必要としないにも関わらず、女性は採集に集団で行くことが多い。採集現場ではとくに協同作業は行われぬが、「野草を摘む」「根茎を掘る」などの個々の行動が競い合うように同時発生しており、結果的に収穫量が増える傾向がある（今村，1993）。

女性たちが協同作業を行うのは、小屋を建てるときである。ブッシュで建材を伐り出してから、キャンプ内で建材を組み合わせ、草でドーム型的小屋全体を葺いて完成させるまでを、複数の女性が協力し合いながら行う。男女を問わず、皮細工やビーズ製品などの工芸品作り<sup>(1)</sup>を、手伝うことはよく見られる。おもしろいことに、その「製作者」に頼まれもしないのに勝手に他の人々が次々と交代して製作を続け、ついにその工芸品を完成させることもよくある<sup>(2)</sup>。

これらの協同作業に共通しているのは、誰かが指揮をとったり作業の方向付けを行っていたりするのではなく、参加者がそれぞれ自発的に自分の役割を見出して行動していることである。このようなことが出来るのは、作業の全体像や完成図を参加者全員が共有しているからであろう。

また、彼らの行動には、きわめて高い同調性が見られる。採集のときに、個々の行動が同時発生していたり、「一箇所に集めては、取りに行く」という周期が一致していたりと、同型的に同調しているだけでなく、相手の動きに合わせて応答的<sup>(3)</sup>に同調している。このような同調性は、ともに居るといった感覚を促し、「採集」「料理」「小屋作り」といった一つの意味のある

場を形成する基盤となっている。

彼らが協同作業を行ったり集団で行動を共にしたりしても、報酬が得られることはほとんどなく、この協同性を「労働と報酬」という文脈で理解することはできない。ただ、いつも行動を共にすることは、その人との社会関係を深め、結果的に食物供与の機会が増えることは充分にありうる。たとえば、「自発的な供与」において、高い頻度で食物を分け与えられる人は、姉妹などの近縁者だとは限らず、むしろ「採集に一緒に行く仲間」であったり「キャンプ内で長時間共にいる間柄」の人なのである（今村、1993）。

しかし、だからといって「行動を共有すること」と「食物を共有すること」が原因と結果として直結しているのはなく、全体を統御する1つのシステムの要素として位置づけるべきであり、システムを介して協同と分配が相互に関連しているのである。

### (3) 分配と協同をめぐるシェアリング・システムのモデル

ここで、分配と協同を統御するシェアリング・システムのモデルを提示する。中心に焦点となるイベントを置き、そのイベントの当事者からの社会的距離を同心円で描く。社会的距離は、実際のキャンプ間の距離のように空間に反映される場合が多い。焦点となるイベントとは、たとえば「倒したばかりの獲物の肉の分配」などである。

肉の分配を例にとると、肉は、第一次分配、第二次分配をへて、日常的な付き合いに基づく「自発的な供与」へ、さらに、料理されて、その場に居る人々すべてへの供与へと、同心円状に対象範囲は広がっていく。

このシステムは、全体として「自然資源の最

大限の共有」を目指している。最大限の共有とは、ある資源を、より多くの人々で利用するということである<sup>(4)</sup>。たとえば100キロの干し肉は、500人の人に分けられるポテンシャルがある。

一方、その潜在的可能性に比べれば、第一次、第二次分配での義務的分配ではせいぜい20人に分けられる程度であり、「肉を限られた人々で所有している」、「肉を充分に分けていない」状態にある。

この平面の、それぞれの社会的距離にある人が、焦点となる資源を「他の人と共有できる可能性の度合い」を「共有度」として、平面から垂直な座標を立ち上げる。このモデルを立体で表すと、中心部は、「占有」によって落ち窪んでいるが、中心から少し離れた「自発的供与」で最大の高さになり、そこから裾野へとただらかに広がっていく「ババロア型」のような形になる。

このようなシェアリング・システムの中心部に「分配（第一次、第二次分配）」という制度が埋め込まれている。この制度は、「肉は決められた相手に分けなければならない」というルールによって成り立っているが、同時に、規則によって決められた人々によって資源を独占することを、一時的にせよ許しているのである。この制度は、「親族組織」などの別のルールを参照しながら、「分ける相手」と「分けない相手」に対象を分節化している。また、肉は所有者の名前とともに、一方向的に持てる者から持たざる者へと流れていく。

一方、シェアリング・システム全体は、「より多くの人と分かち合う」ことを目指しているので、いったん独占された自然資源は、繰り返し行われる再分配と自発的な供与によって、このシステムに関与するすべての人に行き渡る。

同じ種類の食物が二者間で行き来したり、複数の人々が自分の食物を混ぜ合わせてから分け合ったりして、資源の流れよりも、やり取りし合っていること自身が彼らにとって意味を持つことになる。

### 3 身体資源の共有

#### (1) 結婚とザーク——誰と性関係を結ぶか

どの社会にも、一定のルールにしたがった婚姻制度が存在するが、もちろんグイ／ガナ社会にも、結婚のためのルールがある。

とくに、最初の結婚は、望ましい結婚相手<sup>(5)</sup>を女性の両親を中心に親族が選び、男性は、結婚前に女性の両親に肉や毛皮を贈ったり、狩などのさまざまな仕事を手伝ったりしてブライド・サービスを提供しなければならない。また、30年前までは女性は初潮前から婚約者が決められており、初潮儀礼の中に結婚の儀礼が組み込まれていた。

結婚生活は、基本的に一夫一妻で、一つの小屋に同居し、性関係を夫婦の間だけで持ち、夫が獲ってきた肉、あるいは他から分けられた肉と、妻が採集してきた食物<sup>(6)</sup>を妻が料理して家族で食べ、夫婦で子どもを育てるのが典型である。

しかし、一方でグイ／ガナ社会は、既婚者が自分の配偶者以外の相手と性関係を結ぶことをなかば公認しており、このような婚外の性関係を「ザーク」という。

ザークの理想形は、2組の夫婦4人が同意して互いの配偶者を交換することで「小屋を共有し合う」と表現される。しかし、この4者のうち一人でもザークに反対すると、大人たちおよび、それぞれ子どもたち全員が、一気に「汚れた状態」になり、激しい頭痛や腰痛、下痢、

食欲不振が続き、最悪の場合は弱い子どもたちから死んでいくとされる。そのため、ザークに際して、「汚れ」による病気の治療および予防として、儀礼がおこなわれる。儀礼の方法は、子どもたちを含む関係者全員で、大人たちの血と尿を共有するというものである（今村、2001）。

すべての儀礼において重要な「薬」は、血、汗、尿、唾液、垢などの人間の身体に由来する物質である。これらの「身体分離物質」を、儀礼の参加者の身体から取り出し、一箇所に集め、これを参加者全員に配りなおす。このように「同じものを交換する」ことは、食物の分配のときにも見られる。

この「汚れ」の儀礼は、結婚の儀礼と非常に似ている。男女が初婚の場合は、儀礼に尿を使わず血のみを分け合う<sup>(7)</sup>。しかし、再婚のときは、ザークのための「汚れ」の儀礼とまったく同じことを行う。儀礼の形式から見ると、「再婚」と「ザーク」は同じなのである。

また、「ザークの中には結婚が含まれる」と彼らが言うことがあることからわかるように、結婚とザークは対立する概念ではない。伝統的な考え方では、ザークのことを「大きな結婚」とも表現し、一組の男女の結婚より、むしろ望ましいものとさえ見なされていた。かつては、三組以上の夫婦がザーク関係で結ばれることも実際にあったのである<sup>(8)</sup>。

シェアリング・モデルを性的関係に適用すると、中心部に「結婚」がくる。「結婚」とくに「初婚」は、親族関係に基づいたルールによって配偶者が決められ、性交渉は配偶者間に限定される。したがって、「性関係の共有度」はゼロにまで落ち込む。

その外側に、「再婚」が、次に「ザーク」が位置し、ザークにおいて、性関係の共有度は最

大になる。さらにその外側に、さまざまな性的関係が広がっているが、関係における不安定性と隠匿性によって、共有度は低下する。

## (2) 儀礼——「水」の共有

グイ／ガナは、儀礼のことを「治療」と呼んでおり、子どもの誕生、結婚、初潮などの人生の節目、タブーにしていた動物の肉を食べるとき、狩猟が成功しないとき、重い病気や突発的な事故に遭ったときなどに、儀礼をおこなう。

これらの儀礼には、いずれも「薬」が必要である。薬の材料として、植物の根や動物の蹄を焼いたものなどと、血、汗、尿、唾液、垢などの人間の身体から取り出した物質を用いるが、「薬効」が強力なのは、身体から分離された物質のほうであるとされる。これら身体分離物質は、すべて一つの力の源から発しており、同一のものが、形を変えて身体を駆け巡っていると考えられている。彼らは、この物質のことを「水」と呼んでいる（今村、2001）。

親子、キョウダイ、夫婦、愛人関係などのなんらかの関係がある人々の間では、この「水」が共有されている。「水」は各々の身体の中に蓄積された「物質」であり、また、人と人をつなぐ「関係性」でもある。

ザーク関係が結ばれた場合、ザークの男女だけでなく、各々の配偶者と子どもたちもが、この「水」によって繋がることになる。そして、人々のうちの誰か一人でも、嫉妬や憎しみによってザークに反対すると、たちまち全員の「水」は「汚れた状態」になり、「汚れ」という病が全体に一気に拡がる。「汚れ」は、病原菌のような物質ではなく、人々の関係の性質のことなのである。

そこで、治療のために、汚れの儀礼がおこなわれる。「関係性」「つながり」という見えない

ものを、各々の身体から身体分離物質を取り出すことによって目に見える形にし、それらを混ぜ合わせることで、「汚れた水」を「強力な薬」に変化させる。そして、それを各人の身体に戻すことで人々の関係を修復する。

血、汗、尿、唾液、垢などの身体から取り出した物質は、重要な儀礼資源である。また、これらの総称である「水」は生命力そのものであり、男女間の性関係だけでなく、生命の誕生、子どもの成長、初潮、結婚、老成など、人生の全期間を通じて人々の間で交換されたり、蓄積されたりする。したがって、人生の節目を通過する際や社会関係の葛藤が生じるたびに儀礼が行われ、薬へと変容させた「水」を人々の間で共有することが、これらの儀礼のおもな目的となるのである。

## (3) 生殖理論——子どもの共有

既婚女性のザークによって子どもが生まれた場合、この子どもの父親は誰と見なされるのであろうか。

グイ／ガナの民族生殖理論によると、子どもは「男の水」と「女の水」が混ぜ合わさってつくられる。男の水とは精液のことであり、女の水とは羊水および膣内の分泌液をさす。継続的な性交渉によって「男の水」は、少しずつ子宮に溜められていき、子宮の中に「男の水」と「女の水」が「満たされたとき」、やっと胎児の形成が始まる<sup>9)</sup>。

「男の水」は胎児の食べ物でもあるので、妊娠中も性交渉によって胎児に男の水を与え続けなければならない。夫が妻のザークに怒りながらも、生まれてきた子どもに愛情を注いで扶養する行為と、妊娠中に胎児に「男の水」を与えることは、同じだといわれる。ただし、食べ物にも「薬」と「毒」があるように、怒り、嫉

妬、憎しみなどによって「汚れた」水を与える  
と、毒となって胎児に悪影響を及ぼすという。

ザークによって一人の女性が、夫と愛人の二人の男性と性交渉を持って子どもが生まれた場合、彼らはこれを、「夫と愛人の二人の男の水が混じり合って、一人の子どもを生み出した」と説明する。しかも、「水」は、身体の中に蓄積されるものなので、妊娠中に性関係がなかった男性の水も、過去の性行為によって、子どもの形成に関わっているとされる。複数の男性が子どもの誕生に関わっていると考えられる場合、それらの男性の影響度は、「大きい」「小さい」程度の違いとして認識される (Imamura, 2001)。

子どものペイター (社会的父親) は、母が結婚している男性 (夫) ただ一人である。一方、ジェニター<sup>10)</sup>には、母の愛人だけでなく、母の夫も矛盾なく含まれる。さらに、場合によっては、母が過去に性関係を持ったことがある、すべての男性もジェニターになりうるのである。

このことをシェアリング・システムに当てはめると、(1) 節で指摘した「性関係の共有」のモデルと一致する。このシステムの目指すものは、「いかにして多くの男性が子どもを共有するか」ということであり、子どもから見れば「いかにして多くの父親を持つことになるか」ということになる。

## 4 考察

### (1) シェアリングの本質

グイ／ガナの食物分配、協同作業、婚姻、儀礼、生殖理論をめぐるさまざま社会交渉をシェアリング・システムに位置づけて彼らの社会を考察した。食物分配と協同作業は「自然資源の共有」という一つのまとまった系に、婚姻、儀礼、生

殖理論は「身体資源の共有」の系に属す。ただし、たとえば、結婚あるいはザーク関係を結んだことを契機に男性が狩場を増やすことがあった<sup>11)</sup>ように、この2つの系は相互に関連している。

これらの系の総体であるシェアリング・システムが目指しているものは、「資源の最大の共有」である。このシステム内では、できるだけ多くの人が資源を共有できるよう、多くの人を巻き込む方向へ相互交渉がすすんでいる。それは、過剰な人数の参加であったり、過剰な関与であったりして、一つの意味のある場を形成する。

物質の流れだけに注目すれば、食物は何度も繰り返される再分配と供与により、より多くの人に分けられ、所有され、最後に消費される。このプロセスには、「各々が持っているものを一つに混ぜ合わせて、配りなおす」という行為も含まれる。

ここで、「シェアリングの本態」について整理したい。これまで、シェアリングは、「分配行動」といわれるような「食物を乞われた個体が他の個体に食物を分け与える行動」として理解されることもあれば、分配による「物質の平準化」を強調されることもあり、また、物質レベルよりも、「やりとりする社会的関係」そのものに注目する見方など、いろいろな角度から論じられてきた。

しかし、少なくともグイ／ガナ社会におけるシェアリングとは、共有できるポテンシャル、すなわち、「シェアできる」「参加できる」可能性が社会全体に満ちていることであると私は考える。これは、個人レベルでは、自分の行動を決定するときの「シェアできるはずだ」という確信を支える潜在性であり、社会のレベルでは、成員の生存を救い上げようとする社会全体のポテンシャルである。

性的交渉において、また、儀礼においては、各人がすでに所有している身体資源を、一つに混ぜ合わせて、配りなおすことで多くの人と共有しようとしている。

とくに、この「混ぜ合わせる」行為によって、物質の性質が飛躍的に変化すると考えられている。たとえば、「汚れ」の儀礼においては、血や尿などの身体分離物質を各々の身体から取り出し、混ぜ合わせるという行為を経ることで、その物質は「薬」に変わると信じられている。彼らが「最も汚れているものが、最も強力な薬になる」と表現するように、その変化は劇的な質的転換といえよう。

自然資源の共有と身体資源の共有の2つの系を並べることで、シェアリングの本質は、資源をより多くの人と共有するだけでなく、それらの資源を混ぜ合わせることによって、まったく別の新たな物を創り出そうとする力であることがわかる。これはグイ／ガナの社会を生成する推進力にもなるのである。

## (2) 規範の発生

人間社会が、「自然」から切り離された独自のものとして移行する、その時点での特徴としてレヴィ＝ストロースが提唱した「婚姻連帯の理論」はあまりにも有名である。この理論は、インセスト禁忌（タブー）を自然から文化における「根本的手続き」とした上で、人間が自然に介入して秩序をもたらす「規則」なのだとした（レヴィ＝ストロース、2000）。そして、この規則によって、「娘や姉妹をよその男のもとへ婚出させることを強制し、かつまたこのよその男の娘や姉妹を権利の対象に変える」という意味で、インセスト禁忌は「交換を保証し基礎づける」ものになると指摘する。すなわち、インセスト禁忌により、集団間の女性の互酬的交換

が可能になり、外婚単位の集団間に連帯が生み出されるという。

私は、狩猟採集民研究との関連から、レヴィ＝ストロースの理論の中の2つの点、つまり、インセスト禁忌と婚姻制度の成立、およびに互酬性と食物分配の関係について注目したい。彼の理論をあえて簡略化すれば、「インセスト禁忌」がまず最初にあり、それに保障される形で「互酬的交換」が成立し、それによって「食物分配」も可能になるということであろう。

インセストについては霊長類学的研究の蓄積により、多くの霊長類社会でインセストが回避されていることが明らかになった。とくに類人猿の社会においては、メスの移籍によって、結果的に父娘間や兄弟姉妹間のインセストが回避されており、それによって「外婚的」な配偶パターンが成立している。また、相手に対する相互の識別にもとづいて母子間や同母兄弟姉妹間のインセストが「心理的」に回避されていることが指摘されている。つまり、インセストの回避は人間以前の社会にすでに存在するのである。

ただし、今日では多くの研究者が、自然状態で「回避」されていることと、制度として「忌避」されることの違いを強調し、すでに類人猿段階で実行されていたインセスト回避を、人類が明文化することで制度化したのだと考えている。

食物分配については、レヴィ＝ストロースによれば、インセスト禁忌という規則が成立した後に、互酬性、それも、「損得上のバランス」によって支えられた双方向的なものが想定されている。しかし、類人猿段階から認められる食物分配は、規則以前のものであり、しかも、「持てるものから持たざるものへ」の一方向的なものである。

北村（2003）は、霊長類の社会と人間の社

会を比較して、「規則に従う」という現象の成立を基礎的なものとして仮定すれば、「インセスト禁忌」も「食物分配」も説明できると主張している。北村は、人間の結婚の規則について、「結婚しているペアによる独占的な性交を正当なものとする」という想定を人びとが共有することによって、人間家族が、複数の家族が集団内に共存するという形態で成立した。

「規則に従う」という現象の成立は、無秩序から秩序への移行というような、ごく高いハードルを越えることを意味しているのではない。食物分配のような、資源の獲得をめぐる利害の対立を穏当なかたちで解消するときに、「そうすべきだからする」という「第三者的な想定」をメンバーが共有すること、この成立をもって人間社会をそれ以前の社会から区別しうるのだという（北村，2003，23-24）。

### (3) 規範から析出した「制度」

食物分配と婚姻規則は、集団の成員の行動を規制する「制度」であり、どちらも、所有者を限定する機能がある。これらは、それぞれ、「自然資源の共有」「身体資源の共有」というシェアリング・システムを中心に埋め込まれている。シェアリング・システムは、一種の規範であり、その「規範」の中から「制度」が析出したと私は考える。制度は規範とは相反する方向へ、具体的な相互交渉を導こうとする。

グイ／ガナは、食物分配の第一次分配、第二次分配などの初動の分配においては、自分の権利を強く主張する人々である。分配されるはずのところへ干し肉が分けられなかった場合、当事者は人差し指を突き立てて分けなかった者を厳しく非難する。

しかし、そうやってわざわざ獲得した肉も、一瞬のうちに「所有者」の目の前を通り過ぎて

別の人々に配られていく。さらに料理された肉は、その場に居る者すべてに供与される。

この料理の供与における相互交渉は、さきほどの分配場面とは打って変わって抑制がきいたものである。供与の場にいた「客」は、そこに集まっているメンバーの顔ぶれなどから、自分がふさわしくないと自ら判断した場合は、黙ってその場を立ち去る。また、料理を分け与える側も、自分と客の「中間地点」に、料理が盛られた容器をそっと置く。客も主人も、「分ける」「分けない」「受け取る」「受け取らない」の決定を相手に委ねているのである。

さらに、肉の量が多いとき、あるいは、採集物の料理においては、与えた相手から同種の食物を受け取ったり、互いの食材を混ぜ合わせて一つの料理を作って配ったりする。このようなコムニタス的食物分配（黒田，1999）においては、「食物の平準化」や「所有物の移動にともなう負債の感情」などの経済的・社会的機能は持たず、ただ、「やりとりしている」「参加している」という行動自体に意義がある。この行動によって、シェアリング・システム内にいる仲間という共同体意識が形成されるのである。

以上のように、食物の分配・供与においては、「決まった人に分配し所有者を決定する」という制度に基づくものと、「できるだけ多くの人に供与し、所有者を無化する」というシェアリング・システムによる方向付けの、相反する二つの行動原理の綱引きの中で具体的な交渉が行われる。

性的交渉の文脈においても、婚姻規則に基づいた「性（あるいは身体資源）の独占」と、シェアリング・システムによる「より多くの人々との性の共有」の二つの原理が存在する。

その結果、「結婚」「婚外」というカテゴリーの境界が非常に曖昧なものになる。



#### (4) 制度の構造的強化

食物分配と婚姻制度は、どちらもシェアリング・システムから析出したものであるが、制度によって「所有者」を明確にしたことで、シェアリングにおいて「だれその肉」などの名前が付随したまま分けられることになる。つまり、社会的次元での交渉が複雑になる。規範は制度の成立によって、より多層的なものになるのである。

また、食物分配と婚姻という二つの制度は、どちらも親族関係という別の体系を参照している。これによって制度は構造をもち、シェアリング・システムからなかば独立した系を形成しているといえるだろう。しかしながら、グイ／ガナの親族組織は曖昧な部分を残しており、明快にカテゴライズできるものではない。それは、親族名称が、ザーク関係に影響されるからである。つまり、エゴの父親あるいは母親のザーク関係をどこまで拡げるかによって、エゴの「キョウダイ」の範囲もともに拡大するのである。

あるときはキョウダイであることを主張して食物の供与を受け、別のときには、キョウダイであるために結婚の対象からはずされたりする。また、このような親族名称も、別のルートをたどることによって、いとも簡単に別の親族関係にたどり着くことが出来る。

このように、融通無碍な制度とシェアリング・システムは、互いを前提として寄りかかりながら彼らの社会の規則でありつづけるのである。

#### (5) 権威による制度化への危惧

グイ／ガナの制度は、それ自身の範疇化に曖昧な部分を残しており、また、規則に反したときの罰則も「非難される」程度にとどまっている。これは、彼らの社会には権威というものが

存在しないからである。権威のもとに、カテゴリーAとノットAに世界が二分されることがない。

規則の発生、規範化、規範の中からの制度の発生、制度の明文化、構造化、法の成立などの、いくつものプロセスを経て、現代の人間の社会は秩序を構成し共存をはかっている。グイ／ガナの社会も、別のシステムを選びえた可能性をかいくぐって現在の姿で機能している。規則、規範が異なれば、貧富の差などの経済状況、男女の関係、生業への取り組み方、土地の所有、疾病観、集団のまとまりなど、すべてにおいて別の社会であっただろう。彼らの社会は、権威というものが発生するのを恐れ、その手前で踏みとどまることを選んだのである。

#### 註

- (1) 北欧諸国などの海外からの資金援助を受けたボランティア団体が、グイ／ガナなどの遠隔地居住者に現金収入の機会を与えるため、彼らの作った狩猟採集道具や皮の敷物、ビーズ細工などを買い付け、それを観光客に土産物として売っている。
- (2) 彼らはこれを「作って与える」(または、こなれた日本語にすると「作ってやる」)と表現する。
- (3) 「同型的」あるいは「応答的」な同調行動については、市川(1975)を参照されたい。
- (4) ここでは、利用する資源の量についてはとくに言及しない。一回ごとの肉の分配と供与について考えれば、それは、「限られた」資源である。しかし、このようなイベントが何回も続けば、当然、利用する資源の量も増える。
- (5) 互いの親族関係がイトコ(交叉イトコ)の範疇に入り、とくに男性は、優秀なハンター(現在は、現金の稼ぎ手)であることが条件である。
- (6) 狩猟は男性、採集は女性とおおまかな性別分業があるが、夫婦で畏猟に行ったり男性も採集を

- 行ったりと、性別による分業は排他的なものではない。
- (7) したがって、結婚の儀礼のことを、とくに「血を混ぜ合う」と表現する。
- (8) 私が聞いた範囲では、3組の夫婦（一夫一妻が2組と一夫二妻が1組）7人が、1967年から1971年ごろまでの間ザーク関係を続け、この間に4人の子どもが生まれた（Imamura, 2001）。
- (9) 彼らの生殖理論によると、このように「満たされるまでに」、最終月経から約2ヶ月間かかるといふ。したがって、子どもは母親の胎内に7ヶ月間いて生まれるといわれる。
- (10) ジェニターとは、「その社会の生殖理論により、女性を妊娠させ、その子の父親であるコミュニティの成員から信じられている男性（和田, 1988）」である。ジェニターを「生物学的父親」と訳すことがあるが、この訳では、父子の間に科学的に遺伝的なつながりがあるかのように誤解される。この誤解を避けるため、和田は、「子どもとの間に明瞭な生物学的血縁関係があり、遺伝子の継承が認められる男性」に対しては、「生理学的父親（physiological father）」という分類名をつけている。
- (11) グイ／ガナは、他のグループの利用を締め出すような排他的なテリトリーを持たないが、それでも、よく見知っている「自分の土地」というものは存在する。

## 引用文献

- 市川 浩, 1975『精神としての身体』, 勁草書房。
- 今村 薫, 1993「サンの協同と分配——女性の生業活動の視点から——」『アフリカ研究』42: 1-25。
- 今村 薫, 1996a「ささやかな饗宴——狩猟採集民ブッシュマンの食物分配」田中二郎・掛谷誠・

市川光雄・太田至編『続・自然社会の人類学——変貌するアフリカ』アカデミア出版会, 51-80頁。

今村 薫, 1996b「同調行動の諸相——ブッシュマンの日常生活から」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』, 大修館書店, 71-93頁。

今村 薫, 2001「砂漠の水——ブッシュマンの儀礼と生命観」田中二郎編『カラハリ狩猟採集民——過去と現在』, 京都大学学術出版会, 175-230頁。

Imamura, Kaoru, 2001 “The folk-interpretation of human reproduction among the /Gui and //Gana and its implications for father-child relation,” In Ian Keen and Takako Yamada eds, *Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies (Senri Ethnological Studies 56)*, National Museum of Ethnology, Osaka, 185-194.

今村 薫, 2007「シェアリング・システムの全体像——カラハリ狩猟採集民の事例から」『アフリカ研究』69: 113-120。

北村光二, 2003「家族起源論」の再構築——レヴィ＝ストロース理論との対話」西田正規・北村光二・山極寿一編『人間性の起源と進化』, 昭和堂, 2-30頁。

黒田末寿, 1999『人類進化再考——社会生成の考古学』, 以文社。

レヴィ＝ストロース, C, 2000『親族の基本構造』(福井和美訳), 青弓社。

和田正平, 1988『性と結婚の民族学』, 同朋舎出版。

## 【付記】

本稿は2006年度名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。